

第3回 持続可能な生産消費形態のあり方検討会 概要

1. 日 時：令和2年2月20日（木）13：30～16：30
2. 場 所：農林水産省第三特別会議室
3. 出席者：別紙のとおり。
4. 概 要：事務局より、持続可能な生産消費形態のあり方中間取りまとめ案について説明し、各委員から意見聴取。

【開会】

（秋葉座長）本日は、中間取りまとめに記載すべき具体的なアクションと、それを拡げて行くための方法について特にご議論いただきたい。

【第2回検討会後に開催されたワークショップの紹介】

（眞々部委員）個別のアクションを整理するためのワークショップを開催し、ゴールから逆算してアクションを整理した。

（秋葉座長）ワークショップで整理したアウトカムは、中間取りまとめ（案）の「3. 具体的な取組」の前段の文章に組み込んでいる。

（末吉委員）2回目のワークショップでは、消費活動がサプライチェーンの各段階で与える影響をマッピングした「消費活動影響マップ」を試行的に作成した。今後、このようなマップをうまく活用していきたい。

【中間取りまとめ案（資料5-1）について】

（秋葉座長）委員の皆様が各組織で取り組んでいきたいことや、他の委員・組織と連携して実施したいことについて、組織的にオーソライズされていないことでも構わないので、順番にご発言いただきたい。

（大熊委員）中間取りまとめ案の中に具体的な取組が入っているのは良い。ポリシーがあるので、実行力を考えたときに、今やるべきことと今すぐにはやらなくてもよいことを決める必要があるのではないか。具体的な取組について現在検討しているのは、①3月末から全国約30万人の宅配会員向けに、SDGsや環境、社会的活動をテーマに、お客様の買物が及ぼす影響や当社商品や取組みのストーリーを発信するソーシャルマガジンを出す予定、②毎年夏至の日に増上寺で行う「キャンドルナイト」イベントの実施、他にも③本検討会で提案した「サステナブルデー」、④SDGs的な取組や環境に良い取組をしている生産者の表彰の実施を実現に向けて、他社や農水省等とも連携して行いたい。

（大津委員）中間取りまとめを最初に受け取った時は、検討会の議論は面白かったのにこのような形になってしまうのかという印象を受けた。生産者自身の意識向上も重要。「脱炭素チャレンジカップ」という環境省の表彰でグランプリを受賞したが、近所で一緒にやろうという生産者はいない。農水省や環境省が生産者サイドの脱炭素に関する取組や農家の意識改革、啓蒙・教育を行っていく必要がある。ドイツでは環境直接支払いが導入されているが、農業者が生態系を守ることに関する意識を持つようになるまでに、20年かかっ

たと聞いた。ドイツでは環境直接支払いでポイント制を導入しており、環境保全に取り組む生産者が補助金をもらいやすくなっている。また、環境や人口や経済に関する将来予測を踏まえた食料や農業に関するランドデザインが必要。消費者への情報発信について、農家自身が実施するには限界がある。ブロックチェーン等を活用し、消費者側から生産に関する情報を辿れるようにすることが有効。また、消費者側から理想の生活に関するストーリーを発信し、生産者側に参考にしてもらうのも良いのではないか。02Farmでは、1月はじめからLINEの公式アカウントにて、日々の暮らしや注文の変更等の連絡を開始した。02Farmの規模を拡大するというよりは、同じくらいの規模で取組を行う生産者コミュニティを作りたい。

(尾崎委員) 今回の中間取りまとめは、SDGsの目標年である2030年ではなく、2025年を目標年として考えているということが良いか。また、中間取りまとめ案中に「サステナブル」に混じって、一箇所のみ「エシカル」という言葉が出てくるのが引っかかった。セブン&アイ・ホールディングスでは、サステナブルな行動を喚起する海の絵本を出しており、競合企業と一緒にできたらと小林委員と話していたところ。サステナブルやSDGsに向けた取組であれば、競合企業でも手を組みやすい。サステナブルデーもオイシックス・ラ・大地や楽天等の他社と一緒にやっていきたいが、取組の冠になるのは民間企業ではなく農水省。農水省から各民間企業に声をかけてもらえたら、ハードル低くやっていけると思う。「セブンプレミアム」では、4000アイテムのうち、75%はサステナビリティに関する何らかの対応(MSC認証、バイオプラスチック等)を行っているが、サステナブルデーで具体的な取組を行う際、どこまでをサステナブルとして扱うのか、農水省側で最低限の基準を示してもらいたい。

(小林委員) 日本生協連は全国生協に呼びかけを行い、エシカル消費について学ぶ場をつくる取組などを実施している。生協の組合員向けの学習ツールをつくり、広く学べる場をつくることはできると思う。消費活動マップのようなものも、例えば他社と連携して活用することもできるのではないか。また、大学生や高校生の中には関心の高い者が多いため、若い世代を取り込み動く側に回ってもらうことが有効。特に、大学生に対しては、大学生協などに活動と呼び掛けることもできる。全国の生協では学校や行政等と連携して出前講座を行っているところもあるが、企業でも取り組まれており、連携できるのではないかと思う。また、産地訪問でも様々な取組を行っており、生産者との連携も可能。生産者の人手不足などに対して、生産地を支える取り組みなども考えられるかもしれない。

(佐藤(岳)委員) 自分の会社は小規模であるが、家具、インテリア、建築分野において、日本の地域の木を使い、地域の事業者に製造してもらうことによって、地域の文化も継承していく企業。スターバックスコーヒーと連携して、今後5年間にスターバックスが日本全国500か所に新規開業する店舗に、地域材など出来るだけサステナブルな木材を使用することとなった。全国を7つのブロックに区切り、東北地域であれば、東北の木材を店舗で使う。大手企業が動くと、一気に全国展開が可能。セブンさん等のダイナミックに活

動可能な企業と連携できれば、ビックスケールにすることができる。欧米の企業はトップダウンで一気に実施可能であるが、日本の企業は、勉強会やシンポジウム、会議に参加するが、行動に繋がっていないように見える。座長からお話し頂いたように、興味がある方々との横連携を行っていきたい。日本には、生産者、流通、小売等様々なプレイヤーがいるが、それをつないでいくつなぎ役が不足。林野庁が、ウッドチェンジネットワークを立ち上げている。いきなりすべてを木質化することは難しいが、一部分でも木製品に変えていく取組である。実際やってみれば、それほど高価でも面倒ではない。迷っている方々に、アクションを起こしてもらえらるきっかけを作る取組が必要。

(末吉委員) 多岐にわたる範囲であるため、困難であったと思うが、まとめていただき感謝。SDGs は、経済・社会・環境の三つの分野に関わるものだが、文化が入っていない。生産は文化に関わる話。文化を大切にするという言葉を取りまとめに入れて欲しい。

また、高い専門性をもって、市民活動を行っている方々も多いので、実施主体として NGO や民間団体も記載すべき。今後、行われるアクションの積み重ねが把握できるようなサイトを造って頂きたい。ここで実施しているだけでは、見落としが起き、単発のアクションとなってしまうため、全体像が見えるものが必要。

消費活動影響マップを作る作業を行い、良いツールとして再認識したため、今後各地でワークショップを開催していきたい。教科書にエシカルが記載されていても、生きた実践にはつながらないかもしれない。先日のワークショップの際、農水の若手職員が、フェアトレードについて学んだが、実践に繋がっていなかったと話していた。子どもたちがフィールドで体験を通じて学べる機会を作っていくべき。若者と年配、都市と農村等をテーマに、体感できるイベントに力を入れていきたい。ワークショップで、家具チームに参加した経験を踏まえ、家具を通じて森林について学ぶ取組を佐藤岳利委員と行いたい。なお、サステナブルデーを作るのであれば、エシカルデーは断念して協力する(笑)。が、違う時期にそれぞれ実施することも可能。

(関委員) 2月7日に雑誌フラウの SDGs 会員等を対象に大人の食育セミナーを開催した。フラウの会員 700 名に声を掛けたら 52 名の方から参加希望があった。環境について話し合いたい人が増えている。第一部では環境のための大人の食育をテーマに、様々な関係者が話した。第二部では、省庁の方から高校生がグループを作り一つのテーマについて話し合った。その場で素晴らしいアイデアが生まれるものではないが、話し合ったことを持ち帰り仕事などに生かすことができる。

メディアとしては、「盛り上げる」に深く関係している。講談社の変化としては 2019 年 12 月 20 日にフラウの SDGs 号第 2 号を発売した。社内でも各部署で SDGs に関する取組を実施している。国連 SDG メディアコンパクトへ加盟したので、国連からもコンテンツを出していくことを求められている。「盛り上げる」に加えて、「繋ぐ」「育てる」も実施していきたい。2020 年 6 月に発売する SDGs 号では、日本の SDGs の良い取組を紹介し、刺激を受けた者が真

似をし、拡がってくれればと思っている。

(本多委員) 市民から一番遠いところにいる国連の立場で、どのようなものができるか考えていたが、検討会の議論とタイミングを踏まえて、「繋がる」ができると思っている。UNEP サステナビリティアクションは、各者の取組のオリジナリティを、国連として取りまとめてつなげていきたい。併せて、国連が継続してきている途上国支援の取組とトップダイアログ及びキャンペーン活動を一体化させ三点セットで行っていく。このアイディアを基に、大阪万博に向けてアクションをし、SDGs に繋いでいきたい。

3月5日にキックオフダイアログを開催し UNEP 事務局長が講演をする予定。

(眞々部委員) 取りまとめについては、総花的な記載となっている。アクションをする立場としては、todo リストであるが、それぞれがどこに向かっているのかが分かりにくい。コミュニケーションの見せ方としては良いが、これらの取組の裏で、これらがどうつながっているのか、もう少しロジックを詰めたものを別途用意してあった方がいい。

尾崎委員、大熊委員の発言でのコミュニティのようなものが重要。再生可能エネルギーに関する国際的な企業連合である「RE100」の加盟企業を見ると、世の中が変わってきていると感じている。参加している企業がどれだけいるのか、傘の下に集まっているところを見せることは効果がある。キャッチーでよいものを農水省主導で作って欲しい。これまでは末吉委員しか存じ上げなかったが、本検討委員の皆様とつながりができた。このようなつながりの場があることは大変有効。

なにがサステナブルなのかをずっと考えてきたが、これがサステナブルと示すことは難しい。しかし、これはプラスチックではないといったことを客観的に示すことはできる。認証商品に絞ってみても、JAN コードと認証商品が結びついておらず、整理されていない。持続可能な製品のデータベースを作っていきたいが、楽天だけでは難しいので、関わっている方と連携していきたい。

(皆川委員) 中間取りまとめに関して、消費者サイドにいかに関わりかけていくかが重要で、農水省と消費者庁、環境省で実施することに大変意義がある。現場に一番近い地方自治体として様々な形で連携していきたい。

具体的な案としては、イタリア食科学大学と鶴岡市は協定を結んでおり、今後消滅してしまう可能性がある在来作物を SDGs の観点から、地方にある生きた教材として活用したい。

2020年4月に鶴岡市立の農業経営者学校を立ち上げ、卒業生が有機野菜を生産し、市で立ち上げたブランド「Shonai Roots (ショウナイルーツ)」として販売する予定。新たなマーケットが広がるという切り口で、地元の JA とも連携している。環境に配慮した商品の商品表示など、国や消費サイドでも検討していただけるとありがたい。

(事務局) 事務局より、欠席された佐藤委員と、高橋委員のご意見を代読する。佐藤(寛)委員：マルハニチロの活動事例としては、当社訪問の中高生へ水産エコラベル商品の紹介を行い、出前授業で持続可能な水産物についての授

業を実施。水産エコラベルの知名度向上に向けて、MSC や ASC 等の商品を販売し、これらの商品を使った料理教室を今年よりガス会社と連携して開催。

高橋委員：①持続可能な農業、という言葉が業界では有機農業や自然農法を指す言葉として捉えられており、経済的に持続可能、という意味で慣行農業にも使うことに有機農業界からは反発が起きる可能性があるため言い回しに注意する必要。②生産者目線では、規格外品を販売するよう力を注ぐことは価格低下につながるため賛成できない。生産段階では形が悪いものなどは畑に戻して土に戻る。流通過程で生じる破棄に関しては軽減する必要。③野菜の作りすぎを問題視すべき。天候に左右される性質上、一気に野菜ができ価格低下に陥っている状況。小売店などで、常に全ての種類の野菜が揃うことが常態化しており、品切れを嫌うということが作りすぎの構造を作っているため、旬以外のものがないことに対する消費者の許容を促す姿勢が大事。④最近 SNS で宅配注文時の備考欄に商品に傷などがあることは許容するため省梱包をお願いします、と記入すると 7 割くらいの業者さんが梱包材減らしてくれた、というものがあつた。通販業者さんのチェック欄に省梱包(ただし商品にへこみや傷がついても一切異議を申しません)というのがあると嬉しい。(秋葉座長) 委員から具体的な取組について提案頂いた。事務局から補足等があればお願いしたい。

(久保室長) 目標年について前回も 2025 年と説明したところ。2025 年の達成なくして、2030 年の達成はないため、目標年はひとまず 2025 年とさせていただきたい。サイトを作りたいとの意見については、まさにやりたいと考えていることであるので、後半で議論させていただく。末吉委員から提案のあつた文化にかかる記載や、民間団体・NGO については追加する。エシカルとサステナブルの定義の議論については、エシカル協会代表の末吉さんに委員として入っていただいているように、ここでどちらが正しいという議論をするものでもない。分かりにくいという意見があれば、中間取りまとめでは整理するが、実際には両方やっていたらよいと考えている。高橋委員の規格外に対する意見については、我々としてもそのまま市場に流すべきということではなく、廃棄ではなく違う形で新しい市場を作っていくようなこともできるのではないかと考えている。

(秋葉委員) 規格外農産物については、農林水産省としての意見でもあるが、一般的にも 6 次産業化して、余すことなく農産物を使う取組でもある。検討会全体の取りまとめとして、ご理解いただきたい。たくさんのご意見を頂いたが、全員の意見が出そろったところで、自分でさらにアクションを起こせるもの等があれば手を挙げていただきたい。

(大津委員) ①3 (3) 学校給食についてはエシカル・持続可能な食材を、ということを入れ込んで欲しい。例えば、いすみ市は全給食で地元米を使用している。②せっかく末吉委員がいるので、「エシカルなライフスタイルへの転換」などを副題にしたらどうか。③野菜の廃棄削減のパートナーは料理人。「この野菜ありき」から「そこにある材料」でと考える人が増えている。中食・外食でのフレキシビリティができていけばいい。

(皆川委員) 地方で具体的に活動している立場として、持続可能な取り組みを

行っているトップランナーを応援する視点を入れて欲しい。鶴岡の食におけるサステナビリティの取組は、イタリアからわざわざ料理人や大学生が視察に来るなど観光に繋がっている。合成クモ糸繊維開発のスパイバー、田んぼの上に作られたホテル SUIDEN TERRACE など、こうしたエシカルの活動等は最初からは儲からないため、地域やプレイヤーについても応援して欲しい。(秋葉座長)「ほめる、盛り上げる、自慢する」あたりに、(1)②の表彰というのがあるが、そこで拾えるのではないか。

(久保室長) 趣旨は理解。検討する。

(末吉委員) 気候非常事態宣言を出した鎌倉市などの自治体はすでに関心があると考えられ、そこがエシカルという考えを持って行動していけるように、自治体などをターゲットとして考えてはどうか。SDGs 未来都市などもつながっていけると考えられる。

(秋葉座長) 教育機関の立場から、発言させていただきたい。長野県立大学は地方大学としてそれなりのインパクトを自負しており、学生の育成に加えて社会人のリカレントの中で持続可能教育をきちんとやっていくことは非常に大切と捉えている。学生はZ世代なので、大人に教育するより反応が良く期待値は高い。高等教育は持続可能教育をする責務があり加速したい。本学にはソーシャル・イノベーションを専門とする CSI があり、学生だけでなく地域の事業者を持続可能シフトする役割も担っているが、全国的にはまだまだ。是非、委員の皆様の取組に高等教育機関を取り込んでいただきたい。

もう一つ、大学生協の役割は大きいので、生協の持続可能シフトを日生協に後押しして欲しい。

また、白馬村など気候非常事態宣言をしている自治体と組んでいければと思っている。座長としては、頂いた意見はできる限り、中間取りまとめ案に入れていきたい。

【中間取りまとめ広報用資料案（資料5-2）について】

(秋葉座長) 今日は議論を4点お願いしたいと伝えたが、プラットフォームの設置の意見が出たので資料5-2の話もしつつ、検討会が終わった後の議論も含めてシームレスに議論を進めたい。提言の文章を各団体の取組を喚起するツールとして作成した。それぞれの団体の取組を入れていただいて、最後に併せて公表できるとより盛り上げられるのではないかと考えている。

(久保室長) 資料5-2は今回の中間取りまとめ(案)を踏まえてイラストを作成したもの。空欄のところには各者のサステナブル宣言を書いてもらうことを想定。今後、参加してもらう団体にも同じように宣言をしてもらうことを想定。意見をいただければと思う。

(秋葉座長) これからの議論の主旨としては、例示的に取りまとめ内容を入れたツールとしての資料5-2について、使い方も含めて意見をもらえればと思う。また、プラットフォームを作るための具体的なツールとして作っている。仲間を作るためのツール。敷居を下げて仲間を増やしたい。

(大津委員) これを誰に届けるのか。教科書っぽいので、保護者向けとすると心に届くのが問題。

- (久保室長) 前回の議論のとおり、消費者向けは、消費者庁と連携して作るの
は別途検討したいと考えており、まずは、事業者向けのツールを意識して作
った。
- (秋葉座長) 長野県は SDGs 推進制度として、「長野県 SDGs 推進企業登録制度」
を作った。42 項目に対して宣言すると登録される。現在 200 以上の事業者が
登録されており、県の HP 掲載の登録企業のリンクを活用して東京の企業か
ら取引オファーが来たりする。宣言型にするこのように消費者に届ける手
前のプレイヤーから少し進められるのでは無いか。アクションしたいと思っ
ている事業者が取組を始めるためのツールや、自分の取組を位置づけるため
のツールとして考えてもらえたらと思っている。
- (眞々部委員) 文言について、中小企業などが見たときに、具体的なアクショ
ンをイメージするには難し過ぎる気がする。また、主語がばらばらだと思う。
例えば、選択肢を作るのは事業者だが仕組みを作るのはもう少し上のレベル。
- (秋葉座長) 言葉や書きぶりは、イメージしやすいものにした方がいい。
- (久保室長) 主語は事業者のつもりで書いているが、言葉のセンスが足りない
というのは十分認識しているので、皆様からお知恵を頂きたい。
- (末吉委員) 眞々部委員とほぼ同じ意見。座長は、本当に簡単なアクションで
もいい、敷居を低くしたいと言っていたが、この文言から簡単なアクション
を書こうとは思えない。事業者の背中を押してアクションにつなげたいので
あれば、もう少し工夫が必要。消費者が主語に思える文言もある。例えば、
「未来は選べる」は消費者向けと思われるので、変えたほうが良いのでは。
- (関委員) これが正解かは分からないが、「イラストにあるのは願望、サステナ
ブルな未来を作るための項目であり、空欄部分はそれを実現するためのアク
ションを宣言する」という構図ではないか。皆が宣言していくのがアーカイ
ブされていく仕組み等があると良いのではないか。
- (久保室長) まずは宣言をすることで参加表明をしてもらい、ネットワークに
入ってもらって、複数の主体が連携した取組に入りたいと考えている。
- (大津委員) ハッシュタグ的なものの方が広めやすいのではないか。
- (皆川委員) 似たようなものとして、「輝く女性の活躍を加速する男性リーダ
ーの会」があり、行動宣言を行っている。自分もその宣言を書いたのだが考
える機会となり良かった。イラストに描いてある文言の整理は難しいと思うが、
是非わかりやすくまとめて欲しい。自分としては、アクションを記載して宣
言したいと考えている。
- (本多委員) UNEP も同じ悩みがある。消費者に響くストーリーであるかどうか。
心に突き刺さるか。自分の生活にどのようなインパクトがあるかが分かれば、
自らでストーリーを作っていける。
- (尾崎委員) このイラストの使い方を勘違いしていた。個人としてならいくら
でも書けるが、会社としての宣言になるので、記載された文言全てに会社と
して稟議申請が必要。それができないと非常に難しい。
- (秋葉座長) あくまでも例示のつもりだが、文言全てにコミットしなくてはな
らないと見えるか。
- (久保室長) 先ほど関委員が言っていたように、例示部分は理想の社会のイメ

- ージで、空欄部分がアクション宣言という構成でも難しいか。
- (尾崎委員) RE100 にしても、何年後までにどういう目標を達成するかをコミットしなければならない。これを会社に説明するのが難しい。
- (眞々部委員) 稟議書としては難しいと思う。自分が楽天の出展者等にサステナブルな取組を促す時に説明する際は「ストーリーを語ってほしい」、「透明性を確保して欲しい」など具体的なことを依頼。毎年楽天で5万の店舗の中から社会貢献をしている店舗を表彰しているが、表彰されることが流通量を増やす手段になっている。今年から表彰の項目にサステナブルを追加。例えば、「こういうことをやる取組を応援する。あなたのストーリーを教えてください。」といったアワード時のような使い方には有効。
- (関委員) 話は少しずれるが、アワードはわくわくさせる部分がないと話題にならない。「サステナブルな社会を作るための1億人会議」とかにして、「私はこういうことをやっています」というのを書いてもらう。
- (久保室長) 農水省が直接消費者に訴えるのは難しいので、事業者から消費者に伝えて頂くのが有効と考えている。我々のこの検討会の対象は、先ずは事業者だと考えている。
- (関委員) これまでは役所には直接消費者に語りかけているイメージがなかった。もしかしたら、消費者向けにした方が「今そういう時代になっている」ということを伝えられるかもしれない。
- (久保室長) 消費者向けのアクションについては、別途消費者庁と協力して実施していきたい。
- (尾崎委員) この4つのテーマを目指したプラットフォームに参加するというのは全く問題が無いが、ここに自分たちのアクションを書くというのはコミットに近いものになるので難しい。当社の取組である「CHALLENGE2050」は2050年までの目標なので、2025年までの目標とされると齟齬が出る。
- (秋葉座長) 確かに大きな組織であるほど、意思決定のプロセスは難しいというのは分かるが、持続可能へのシフトは切羽詰まっていることを伝え、みんなが参加する必要がある。空欄でもいいからプラットフォームに参加するというのもありかと思う。取組の輪が広がっていくきっかけになればいい。様々な切り口から取組をしてもらえたらいいし、その流れを作るためのツール。
- (久保室長) 仲間集めの障害になるのであれば本末転倒。この資料が考えるきっかけになる組織については使ってもらえたらと考えている。
- (小林委員) プラットフォームを作るのはいいが、複数の省庁で似たようなものがある。そのことについてはどう考えているのか。
- (久保室長) 前回の検討会后、2回のワークショップをやって、環境省と消費者庁にも参加してもらっており、この取組については連携できていると考えている。小林委員の御意見は分かるが、今回はこのテーマでと思っている。
- (環境省) クールチョイス、プラスチックスマートなど色んな国民運動を行っている。この持続可能な生産・消費の取組については、重複感がないように、ご負担にならないようにしていきたい。
- (消費者庁) 前回、事業者向けの取組について聞かれたが、宣言をしてもらう

取組はしている。食ロス削減の取組についても、事業者向けがある。重複するものはあるが個人的な意見としては、それぞれの取組の切り口は異なることから重複していても良いと思っている。

(久保室長) ある企業から、業種の所管があるので、同じことでも所管省庁から言ってもらわないと、上がうんと言わないと言われた。できるだけ負担をかけないようにしたいと思うので、ご理解いただきたい。

(大津委員) 例えば、JA が使う時にはどうなのかなというのを悩んでいた。

(秋葉座長) 色々な場所で似たようなことをやっているという印象は確かにある。ただ、それくらい全方向で進めないといけない話。食に関しては特に、食を所管する省から発信するインパクトはあると思う。JA が使ってくれることは希望したい。また、省庁が連携して取組を進めることは必要。

この資料について、企業は使いにくいという御意見は確かにという思いも持った。プラットフォームと言っても、固定したメンバーの組織でなく、広がっていくフレキシブルな集まりになって欲しいと思っている。

(久保室長) 例えば、「私の宣言」とかにしてもいい。どうしたら、ハードルを下げつつ、参加しやすいツールになるか、引き続き御意見をいただきたい。

(秋葉座長) 同じ方向を目指す仲間を増やしたいという方向性と、その具体的なツールが必要だ、ということについては同意をいただいていると思っている。また、宣言にして敷居を下げたつもりだったが、仕立て方を工夫すれば、使えるようになりそうということまでは同意してもらえたとしてもいいか。大筋は同意いただけたということで感謝。

株主に対するコミットメント、課題があるということも理解できる。イラストについては表現も併せて再考すれば使えるものになるのでは、というご意見と思うので事務局と相談したい。報告書がどこかで眠っているというのはもったいないので、とにかくアクションにこだわりたい。やりとりを通じて公表するところまで持っていきたい。令和2年度も事務局のほうで、なんらかの場をセットするとのことなので、皆さんの取り組みをお土産に集まってほしい。また次のコミュニケーションができたらと思う。

(秋葉座長) 最後に。この幅広い議論をどうまとめか、と最初は思っていた。資料で出せば、総花論すぎるのではという意見も出るだろうが、全力でここから未来を変えていくために、その仲間がもっと増えていったらよい。2030、2040年になって振り返って、あそこがターニングポイントだったと思えると良いと思う。

(久保室長) 本日いただいたご意見については、座長と皆様にご相談した後、皆様に共有して公表したい。細かいところについては座長一任ということでよいか。

【一同同意】

(了)